

「どちらさまですか？」

中村 龍介

日本の携帯電話の普及台数は昨年末に一億一千万台を越え、今や普及率百％に近づきつつある。だが、簡単にポケットに入るハンディな携帯電話が世の中にお目見えしたのは、それほど昔のことではない。

約十五年前、私はアメリカに駐在していた。当時、現地のビジネスマンが仕事の途中にポケットから電話を取り出して何処かに連絡を取る姿を見て、とても羨ましく思った。

四年の任期を終えて日本に帰国すると、早速売り出されたばかりの携帯電話を買い求めた。出先から会社に連絡を入れるにも公衆電話を探す手間が省け、大いに重宝した。

プライベート面でも携帯が活躍した。特に、車椅子の妻を伴った旅行には必携であった。目的地にある観光案内所の電話番号さえ調べておけば、身障者用のトイレや駐車場等の所在が事前に分かる。

二〇〇一年の夏、妻と長女を連れて西日本方面に出かけた。広島まで飛行機で行き、そこでレンタカーを借り、山口から北九州にかけてドライブ。四泊五日の旅である。

広島では、尾道から「しまなみ海道」を通って瀬戸内海の島巡りや厳島神社への参拝。山口では、新婚時代を過ごした宇部に滞在。下関から関門橋を渡り門司にまで足を延ばした。旅行中は長女の手助けもあって何の支障もなく楽しい旅を終え、東京の自宅に予定通り帰ってきた。

翌日は出勤日。久し振りの出社に慌しく準備をしていた。財布、定期、手帳、時計：と、身の回りの品を揃えていき、携帯電話がないのに気づいた。

洋服のポケット、新聞の下、小机の引き出し。思い当たる場所を捜すが、見つからない。傍らでは車椅子の妻も捜索に協力してくれた。

携帯を捜すには、別の電話から携帯にかけてみるのが早い。着信音で所在が分かる。

家の固定電話から携帯の番号を回す。ツルルと呼び出して

いるのが受話器から聞こえる。肝心の携帯の着信音は聞こえない。妻も耳をそばだてながら首を横に振っている。

その時、カチャツと固定電話の受話器から音！

「もしもし：」と男の声。

何か返事をしたいのだが、全く予期していなかった事態に何と言えばいいのかわからない。

「すみません。どちらさまですか？」

思わず訊いてしまう。こちらからかけておいて何とも奇妙な台詞だ。

「こちらは『門司港レトロ』の食堂です。昨日、携帯電話の忘れ物がありました」

「そ、その電話、私のです」

思いがけないコトの進展に思わず声が大きくなる。同時に、『門司港レトロ』と名付けられた、古い建物を集めた場所の一郭でレストランに入ったことを思い出した。が、次に何を願うすればいいのか、咄嗟には思い浮かばない。

「住所を教えてください。着払いでお送りしますが：」

先方の手馴れた対応に、チグハグだった会話が漸く順調に流れ出す。

「有難うございます。本当に助かりました」

住所を連絡して電話を切り、一件落着。心配そうに電話の様子を聞いていた妻に笑顔が戻った。

(了)

〔二〇一〇年五月記 原稿用紙約三・五枚 課題「携帯電話」〕